



相手を思いやる心 ～日本人としての美德～

校長 藤原 明美

青葉台の街の銀杏並木は、緑と黄色のコントラストが鮮やかです。陽の当たる角度によって黄葉の進み方が全く違い、日光のもつ力強さを感じます。

さて、現在カタールで行われているサッカーワールドカップ 2022に関心を寄せている方も多いのではないのでしょうか。大会出場に至るこれまでの長い道のりに想いを馳せ、日本代表チームの活躍に、言葉にできない様々な感情に包まれていると思います。

私は、試合の結果だけでなく、世界の中で共に生きる日本人として、我が日本チームを誇りに思っています。「日本中が歓喜に沸いたドイツ戦、その時に日本が手にしたものは『勝ち点3』だけではない」と、日本チームとサポーターの行動や立ち振る舞い、その奥にある考え方～日本人の美德～について、世界で数々の報道がなされました。整頓されたロッカールームに11羽の折り鶴。試合後のスタジアムで、日本人サポーターがゴミを拾う姿等々が、大変話題になりました。

賞賛される一方で、相反する意見も少数ありました。今回はドイツ戦での劇的勝利と重ねて大きく報道されましたが、これらの行動は、2018年のロシア大会以前からも人知れず続けてきていることと聞いています。このワールドカップを開いてくれたこと、この場を提供してくれたことへの感謝の思い。日本チームや日本人サポーターは、注目されるずっと前から、その思いをあの行動で伝えていたのだと思います。

日本において昔から受け継がれてきた、相手を思いやる心、美德。学校生活でも、校外学習に行く時、必ず「来た時より美しくして帰ろう」と声をかけます。

今回のニュースを見て、心に浮かんだことがあります。レストランで食事をした時いつも、卓上にある1枚のペーパーナフキンで全部のお皿の汚れを拭き取り、テーブルの中央に重ねる母の行動を見て、私は育ちました。「美味しい料理をありがとう」という、お店への母なりの感謝の伝え方だと思っています。

教室でも、子どもたちの行動の中に、思いやりの心を感じる事が数多くあります。当番でもなく、やることにもなっていないけれど、自分からほうきを出して教室をきれいにしている子、誰にも気付かれることなく、さりげなくみんなの机を並べている子。気持ちのよい教室にしたいという純粋な思いが伝わってきて、ほっこり、温かい気持ちになります。ここにも、受け継がれてきた日本人としての美德を感じます。

12月、季節は冬を迎え寒くなりますが、「相手を思いやる心」の大切さ、「人権」について考える取組を毎年行っています。「自分を大切に」「自分と同じようにみんなを大切に」。相手の気持ちを考える、思いやりや心の温かさを伝え合える、12月になってほしいと願っています。

私が青葉台小に着任した時に頂いた校長室の胡蝶蘭は、毎年冬に向かうこの時期に花芽を伸ばします。「寒い季節に、温かな気持ちにさせてくれてありがとう。」そんな気持ちで窓辺の胡蝶蘭に語りかける日々です。

2022年も、残り1か月となりました。保護者の皆様には、感染拡大防止のための短縮授業にご理解ご協力をいただき、感謝申し上げます。今後とも感染対策に努めながら、教育活動を進めてまいりますので、変わらぬご支援をよろしくお願い致します。